

神奈川宿で唯一残る老舗料亭 田中家でランチを楽しむ



2023.2.18

神奈川県横浜市中区に残された唯一の老舗料亭田中家のランチの記録

【概要】 支援する会の山部さんからの提案で神奈川県横浜市中区の今残っている絶滅危惧種の料亭の田中家でランチを食べようとの提案で大矢会長を含めて6人で食事会をしました。

この田中家は文化3年（1863年）創業の老舗料亭です。160年の歴史を刻んでいまでも頑張っています。山の中のぽつんと一軒家ではないですが、周りはずべてビル群に囲まれています。ここの一軒家だけが木造の建物です。5代目女将の話だとぼろ屋だと周りから揶揄されているそうです。女将はコンクリートの建物は嫌いだと吠えていました。

幕末から明治・大正・昭和の時代の日本をリードしてきた政治家や経済界の人々、文化人たちが利用したそうです。この料亭で坂本龍馬の妻のおりょうさんが勝海舟の紹介で働いていたと料亭の前の看板にかかっていたそうです。

女将さんはコロナ禍でお客様の減少には近隣に出かけてガイドなどもやってなんとかお客様をつなぎとめる努力を続けてきたようです。仲居さんもやめていきざるを得なかったようです。苦しい胸の内を吐露していました。

ものすごいパワフルな女将さんでした。日本人は歴史文化を大切にしないと嘆いていました。これからもこの老舗料亭を維持できるかどうかは市民の方々の協力がない限りは難しいのではないかと個人的には思いました。時代の変化でなくなっていくには仕方がないのでしょうか。それとも保存し守っていくことが必要なのでしょうか。動物植物の絶滅危惧種と同じように何とか維持する方法を考えていかないと失われてからではどうにもなりませんよね。

庶民がちょっと行くには値段が高いので、なにか晴れの日でないといけませんね。料理は美味しかったけれど、料亭の場所代と女将の講演料と食事代とおしゃべりということだったのではないのでしょうか。満足でした。

一応、皆さんにお知らせして興味があり、何かの晴れの日でも利用していただければありがたいなと思い記録しました。

江戸時代にタイムスリップしてみるのも面白いと思います。安藤広重の浮世絵ではこの料亭の先は海でした。海が埋め立てられ現在の横浜駅があります。以前NHKのブラタモリでもこの料亭の先が海だったと言っていました。以下体験記です。

【日付】 2023年2月17日（金）11:30～13:30

【メンバー】 大矢会長、西山、水谷、加藤、山部、根岸

【お店】 田中家

〒221-0834 神奈川県横浜市神奈川区台町 11-1

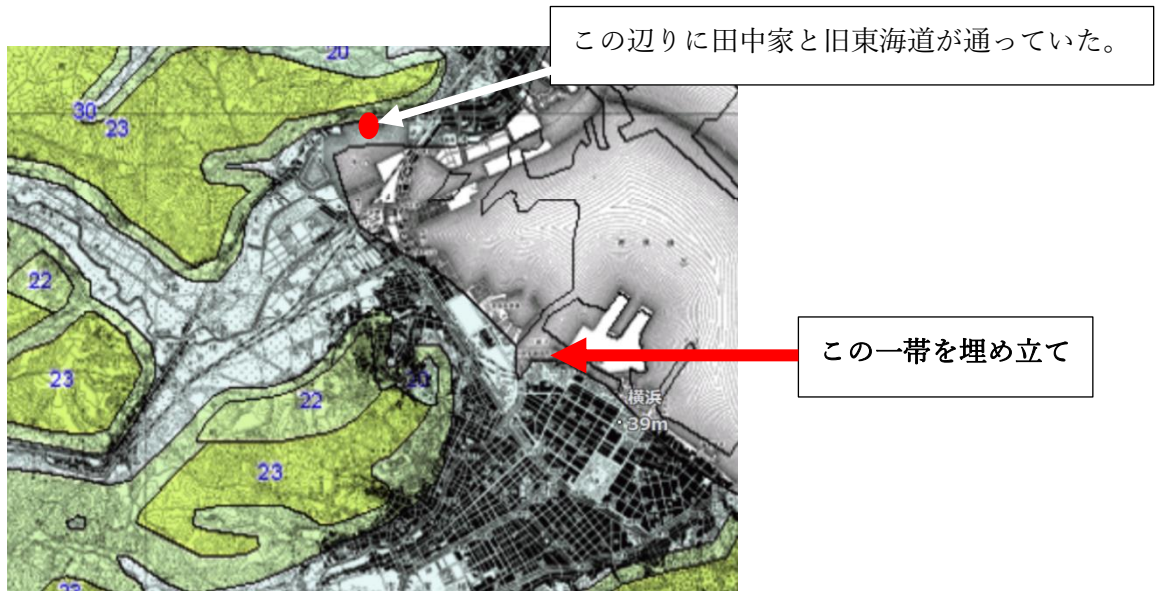
TEL: 045-311-2621

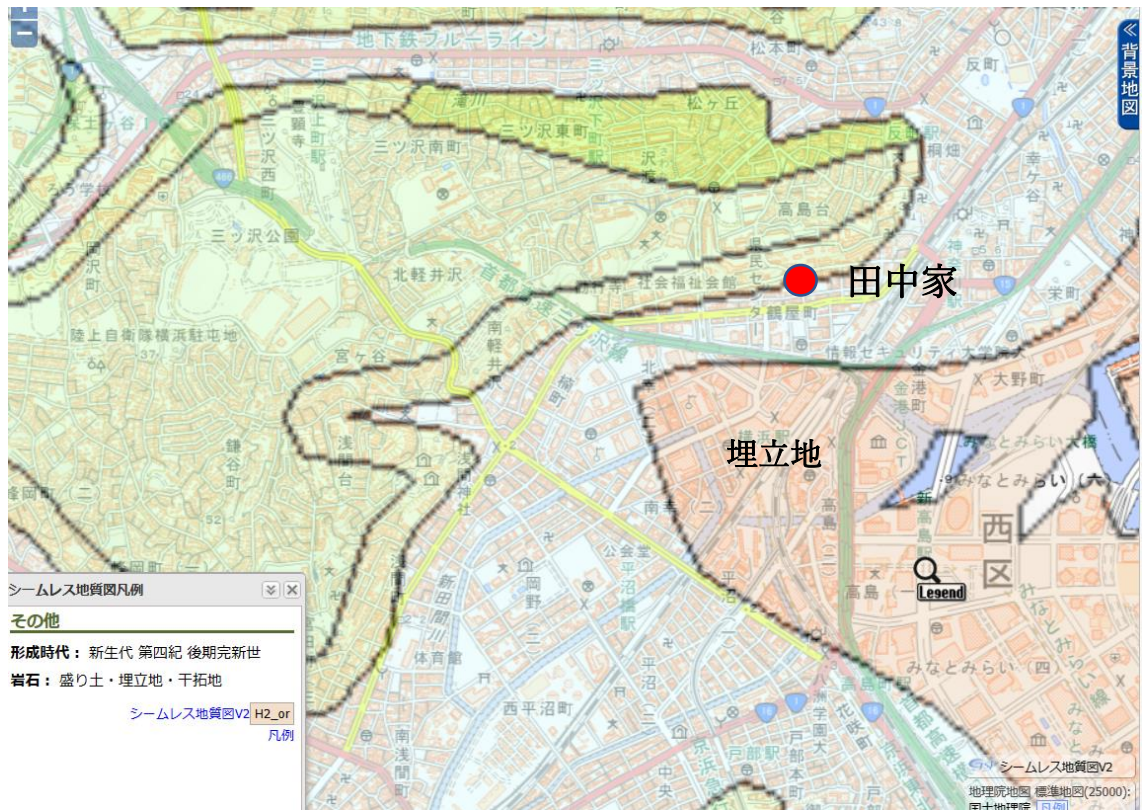
【食事代】 ランチ 7,600円（税・サービス込み）

【地図】



【地層】 1896年～1909年頃の横浜港付近の海の状況





【写真】



田中家の前の神奈川宿の看板。安藤広重の浮世絵と田中家の歴史が書かれている。





参加者メンバー6人



玄関に当時の写真と絵が掲げてありました。



安藤広重の東海道五十三次神奈川宿。東海道筋には旅籠がっらなっている。当時は 1300 軒ほどあったという。いまは田中家のみとなってしまう。この海は埋め立てて横浜駅となっている。



老舗料亭という敷居が高く、高嶺（値）の花という場所でしたが、誰かの言葉ではないですが、場所代、女将の講演代、食事代、おしゃべりという値段でまあまあ。といったところでしょうか。



前菜 旬味盛り



西山さんのスケッチ



お椀 海老真丈 (海老の練り物)



旬の鮮魚二種



季節の焼物
タチウオとレンコン



お食事
本日の炊き込みご飯
そら豆、鰻、梅干し、しらす、卵焼等



香の物 二種盛り、留椀 赤出汁、
炊き込みごはん



水菓子 白いおしるこ



女将さんのパワーあふれる独演会。聴きごたえがありました。
女将の言葉。たった一度しかない人生を大切に生きよう。迫力がありました。
これだけでも料理の値段の価値があったと思いました。





書額。右から福雲満堂と読む。雲の湧くが（きんと雲…孫悟空が乗る雲か）ごとく幸福に満たされている部屋（座敷）。幸運をもたらす座敷という意味か。2代目の主人が書いたという。雅号は雅舞。ここにいるお客は幸福を一杯満たす。という意味だそうです。





○で囲まれた人がおりょうさん。当時 642 人が働いていたそうです。当時の敷地面積は 1200 坪もあったそうです。



左の写真が新橋・横浜間の機関車のルート。横浜は今の桜木町駅辺り。





灯籠



家紋



西山さんのスケッチ。まさしくビル群に囲まれたぽつんと老舗料亭の一軒家でした。

【資料】新聞記事の切り抜き。これからは料亭文化を発信していきたいとの抱負でした。

(第3種郵便物認可) 2020年(令和2年)9月8日(火曜日) 言葉 堂

かながわ 経済

人

料亭文化と歴史伝える



幕末の志士・西郷隆盛や高杉晋作らが通い、坂本龍馬の妻おりょうが仲居として勤めた横浜最古の老舗料亭「田中家」。一時は廃業の危機に陥ったが、それを再生させたのは5代目女将の平塚あけみさん(73)だ。近代化の波が押し寄せる街中で、歴史に彩られた古き良き伝統を今なお守り続けている。

——料亭を引き継いだ頃の様子は。

パブル崩壊後の長期に及ぶ不況や、「官官接待」などへの批判もあり、料亭は冬の時代でした。かつて58軒の料亭でにぎわった街も、私の代には4軒を残すのみだったと思います。

田中家も廃業寸前の経営危機にありました。跡を継いだものの、着付けも芸事もできず、さんさん陰口をたたかれ、古参の仲居が次々と辞めていきました。そんな中でも、常に「先祖から受け継がれて

田中家(横浜市) 平塚あけみさん 73



きた歴史を消してはならない」との思いで再建を目指しました。

まずは、近所から「お化け屋敷」といわれられていた200坪(約4000平方メートル)の旅館部分を処分し、料亭としての生き残りにかけま

た。「一見さんお断り」という格式張ったルールもやめ、昼の会席を始めたり、結婚や七五三などのプランを企画したりして敷居を低くしました。

——大切にしていることは。

料理や芸能、日本文化、会話などです。料理は「純和風」にこだわらず、四季折々の旬の食材を利用した和洋折衷の新メニューを開発して、幅広いお客さんに喜ばれるようにしています。

太鼓や三味線、踊りなどの芸能で座を盛り上げるほか、入り母屋造りの建物や庭園、掛け軸や生け花などから日本文化のエッセンスを感じてもらえるよう心掛け、お客さんとのコミュニケーションも大切にしています。

そして何よりも「たわわっているのは田中家の歴史のPRです。明治の元勳・伊藤博文や夏目漱石ら文豪が投宿するなど、輝かしい歴史が刻まれています。それを前面に打ち出し、お客さんには写真や資料をスライドにして見てもらえるようにしています。

——今後の抱負は。

新型コロナウイルスの影響で、3月以降のお客さんは3割ほどに減り、4月は丸々休みました。辛い、うちは全て個室で、天井は高く、空間が広いので密になる心配はあまりありません。ただ、このような状態が長く続くようなら、「会席弁当」の販売なども検討しなければと思っています。

今後は、木造建築や着物、料理、邦楽などの日本文化が堪能できる「料亭文化」の魅力を子供たちにも伝えていきたいです。かつて数百人いた芸者も現在は4人だけ。「囃り物」ができる芸妓の育成にも取り組んでいきたいと思っています。

(聞き手・鈴木英二)

郷土の1863年(文久3年)創業。江戸時代後期の浮世絵師、歌川広重の代表作「東海道五十三次 神奈川」に描かれた茶屋「さんざん」を初代の遺聞新長衛が買い取り、「田中家」として営業を始めた。家訓は「ネバキアアップ(絶対に諦めない)」。昼席(午前11時30分～午後2時)と夜席(午後5時～10時)で、完全予約制。資本金は1000万円。従業員は13人。